

如し、人々手を拍、奇なりと呼び、妙なりと稱讚す、千勝万景、應接するに遑あらず、雲脚下に起るか
とみれば、忽晴て日光眼を射る、身は天外に在が如し、是絶頂は周一里といふ、莽々たる平蕪、高低
の所を不見、山の名によぶ苗場といふ所、かしこにあり、そのさま人のつくりたる田の如き
中に、人の植たるやうに、苗に似たる草生ひたり、苗代を半とりのこしたるやうなる所もあり、こ
れを奇なりとおもふに、此田の中に蛙皇龕もありて、常の田にかはる事なし、又いかなる日でり
にも田水枯すとぞ、二里の巔に此奇跡を觀ること、甚不思議の靈山なり、案内者いはく、御花園よ
り、ひたる所別に徑ありて、龍岩窟といふ所あり、窟の内に一條の清氷ながれ、そのほとりに古錢
多く、鰐口二ツ掛りありて、神を祀る、むかしより如斯といひつたふ、このみち今は草木に塞れて
もとめがたしといへり、絶頂にも石に刻して苗場大權現とあり、案内者は此石人作にあらず、天
然の物といへり、俗傳なるべし、こゝかしこ見めぐるうち、日すでにくれて小屋に入り、内には挑
燈をさげてあかりとし、外には火を焼てふたゝび食をと、のへ、ものくひて酒を酌、六日の月皎
皎として空もちかきやうにて、桂の枝もをるべきこゝちしつ、人々詩を賦し歌をよみ、俳句の吟
興もありて、やゝ時をうつしたるに、寒氣次第に烈しく、用意の綿入にも玄のぎかねて、終夜焼火
にあたりて夢もむすばず、玄の、めのそらまちわびしにはれわたりたれば、いざや御來迎を拜
たまへと案内がいふにまかせ、^{おもむろ}拜所にいたり、日の昇を拜し、したくと、のへて山をくだれり、別
紀行あり、こゝには其略をいふのみ、百樹曰、余越遊したる時、牧之老人に此山の地勢を委しくき、眞景の圖を
も視たるに、巔の平坦なる、苗場の奇異、龍岩窟の古跡など、水にも自在の山なれば、おそらくは上
古、人ありて此山をひらき、絶頂を平坦になし、馬の背の天險をたのみて、こゝに住居し耕作をも
せば、其徵する端をも得べくや、博達の説を聞ん、